

社会システムでのインターフェイス・エージェントモデル

- 社会身体の反省機能の形成は可能か -

1、研究発表の目的、（はじめに・問題提起）

現代科学技術文明点検のための人間社会学理論としての反省機能を持つシステム論の課題

- 1、科学技術文明社会の病理現象を分析し、その解決に有効な社会理論
- 2、人間と社会のための科学である人工物システム科学としての社会システム論

2、社会システムの反省補助機能の形成のために問われる課題

社会システムと社会身体概念の形成

- 1、同時代のすべての生産物はその構造の中にそれを作った社会文化の観念形態を所有する
- 2、社会文化現象はその観念形態の要素（文化的遺伝子）によって生み出されている
- 3、社会文化の意識構造のみでなく無意識構造も含まれている
- 4、遺伝子免疫学の中で展開した論理の社会的応用

社会システム論の科学性とはなにか、実践的プラグマチズムと解釈学

- 1、システム主体とは何か。システムと主体という二つの用語が組み合わされる条件とはなにか。
- 2、主体とは対象化できない自己のあり方を言い、システムとは対象化された世界や自己のあり方の説明や解釈である。
- 3、システム概念は、系によって多種多用であるため、どのシステムを具体的に示すのかを前提にしないシステム論はない。
- 4、もし仮に、一般システム理論が成立するのなら、その条件を整理する必要がある。つまり、工学の分野で成立したシステム概念を社会学の分野に適用する場合、工学的システム概念を定義する公理系が社会学の領域に応用可能であるという証明問題を解く必要がある。
- 5、拡張の前提となる公理系の中で、拡張の対象となる公理の正当性を論証することは不可能である。例えば、熱力学の公理系の中で、統計力学への公理拡張の権利を見い出そうとしているようなものである。
- 6、公理の拡張の妥当性は、古い公理が拡張された分野で、その公理によってより合理的、つまり都合良く世界が解釈されることによって、証明される。
- 7、人工物を対象とする科学、社会科学や工学などの科学性は、それらの理論や解釈によって生産された人工物（生産物、文化記号）によって導かれる、社会文化的な効果の結果によって、その合理性が証明される。つまり、それらの理論を支える哲学は、論理実証性ではなく実学的プラグマチズムである。
- 8、人間社会学は、科学のための科学と言われる普遍科学の立場を持たず、人間社会学の解釈主体の文化性や時代性を前提にし、その解釈学がそれらの世界の変革に有効である限りに於いて、その理論の正しさが証明される。

社会システム論の認識対象と認識主体との関係

- 1、社会システム論の科学性の立場を最もよく説明できる分野として、生活世界の科学がある。
- 2、生活世界を解釈する主体は、その解釈対象である生活世界に規定されている。生活主体の分析はその研究対象である生活世界のあり方、つまり生活世界の認識のあり方の中を通じてなされる。
- 3、生活世界の構造は、生活者の生活環境を決定している文化的観念形態によって決定されている。その分析は、これらの観念形態のあり方、つまり生活資源の記号を解明することによって可能になると考えられる。
- 4、言い換えると、生活の科学は物理学や化学のような普遍科学としては成立せず、生活主体の文化性や時代性を前提にした解釈学として成立する。
- 5、生活世界の科学は生活主体と生活の場の相互規定の関係を前提にして成り立つシステム論である。しかもこの科学の課題は、生活改善のための実践的な知性や技術の体系を確立することであり、そこに貫かれている科学思想とその学問の成立条件は生活重視の思想である。

社会システム論のなかでの主体の問題と自律的エージェントモデル

- 1、システム論に於いて主体の問題が問われているのは、環境の変化に対して適切な状況判断を可能にする制御システムの設計が生産効率を生み出すための重大な課題になっているからである
- 2、その理想的なシステムは、システムが反省や点検の機能を自律的エージェントとして持ち、主体的に状況を判断したり、柔軟に環境に対応する機能が、備わっているとイメージされているので、システムの点検機能はシステムに本来ある自律的なエージェントとして解釈される。
- 3、このモデルは、システムの自律的な点検する機能を考えるために、議論しているシステムの主体問題が呼び起こしている認識論の歴史的議論の経過を、考慮しないで提起されている可能性がある。

社会身体の惰性態と生活主体の欲望で動くシステム

- 1、社会文化観念形態の維持のための社会身体の遺伝子増殖機能と環境の急激な変化に対応した社会身体の遺伝子組み換え機能の二つのタイプの社会身体の自己組織的な機能をもっている社会システムや生活システムに関する議論では、それらの社会身体のマカニズムを理解する理論が必要になる。
- 2、その理論では、社会身体機能は社会文化観念形態を意味する記号、つまり生産物の共時性の維持として働き、伝統文化や社会秩序の維持を行う社会機能の惰性態、社会身体の伝統的観念形態、つまり文化的ドグマの保存を意味する。
- 3、社会身体機能は社会文化観念形態を意味する記号の共時性の構造の変換として働き、内部のプログラムの変換によって外部環境に適応する戦術を選ぶ。同時に、社会システムの不安定な状態を解決しようとして、社会身体機能の遺伝子の組み換え、社会身体機能の伝統的観念形態の変換を行い、社会身体自体を保存する。
- 4、共時性の記号構造をもつ社会文化資源や生活資源と通時性の記号構造によって運動する社会的活動主体や生活主体との関係が社会システム論の理論となる。
- 5、生活主体を取り巻き、その存在を決定している社会文化資源や生活資源は、共時性の固定した文化観念形態、つまり社会文化のドグマによって成り立ち、また、生活資源を生産し変革する生活主体は、欲望と呼ばれる精神エネルギーによって機能している。つまり、生活や社会システムを維持し動かす力は、社会文化のドグマという社会身体機能の惰性力と生活主体の生活資源を

生産し変革する欲望や行為である。この二つの相反する機能によって生活システムは成り立つ。

社会システムの点検機能と生活主体の反省行為

- 1、社会システムの点検機能と生活主体の反省行為は同じではない。
- 2、点検は強制的で制度的に行われるシステムの機能を確認する行為である。点検は対象化されている生活環境や生活資源についてのみでなく、生活主体についても行われるが、その場合、自発的なものや主体独自の価値観を基準にするのではなく、社会的評価の基準をもとにしてなされる。
- 3、しかし、反省は主体的な作業であり、個人的なものであり、一人一人に反省の仕方やその内容が違ふ。
- 4、社会システムの点検機能は自律的なエージェントとして作り出すことができる。それらは、社会点検の制度をとって民主主義の社会ではすでに作られている。しかし、これらの制度は、社会身体の惰性力によって動くため、点検の制度という保守的な機能となり、そこに社会点検という社会文化の固定観念、ドグマを生み出すことになる。
- 5、つまり、社会システムとして、その点検機能を社会機能や制度として設計するシステム論は、その限界から逃れることは出来ない。つまり、環境の変化に対して適切な状況判断を可能にする制御システムの設計を課題にしたシステム論での主体問題の解決は、システムの点検機能のデザインのみでは不十分であると思われる。

3、社会システムの反省補助機能・インタフェース・エージェント

「反省行為は制度化出来ない」と「生活行為は固定概念によって営まれる」

- 1、生活主体が安定しているためには、保守的な制度や固定した社会常識が必要である。保守的な生活環境では、個人の自由な行為や欲望はことごとく否定される。
- 2、生活環境をよりよく変革するためには、そのための生活主体の欲望や行為が必要である。しかし、個人の欲望によって、社会秩序は破壊され、社会システムは不安な状態になる。
- 3、反省行為は、自己の固定観念を暴き、社会的文化的なドグマを破壊する行為である。つまり、反省行為の自己の変革によって完成する。しかし、その反省行為によって結論される自己の変革は、必ずしもこれまでの惰性的な生活の基盤を肯定し、それを維持するとは限らない。日常生活の否定をもって人は反省行為を実現する場合がある。つまり、反省を制度化することはできないのである。
- 4、徹底的な反省は日常性を否定する。そこでは人は生きることはできないのである。つまり、安定した生活は、非反省的な生活である。反省行為と日常生活行為とは相反する要素を持っている。
- 5、反省は自然発生的にはできない。

フレキシブルな社会システムの点検機能としてのインタフェース・エージェント

- 1、社会システムの中に自動的に稼動する反省機能を設計することは不可能である。社会システムの中にその点検を制度化することは可能である。しかし、その点検の機能を反省機能と呼ぶことは出来ない、では、社会システムでは、環境の変化に対して適切な状況判断を可能にする制御システムの設計は、まったく不可能なのか。
- 2、そこで、社会システムと生活主体に対して、自律的なエージェントとして機能するインタフェースを考える。ここでは、これまでの一般システム論で定義されたインタフェース・エージェ

ントという概念で統一的に表現する。反省、つまりシステムの自己点検作業は、社会システムの自己内部のプログラム、つまり制度で可能になるのではなく、補助的にシステムとして社会システムに外付けしたような点検機能を持ち込んで、その点検機能とシステムの相互作用として可能になると考える。このことが社会システムにおける反省の補助機能としてのインタフェース・エージェントの設計である。

- 3、補助的にシステムとして社会システムに外付けしたインタフェース・エージェントを機能させるのは生活主体である。しかし、その機能は、非日常的な生活行為として成立している。例えば、ボランティア活動等。

4、演習問題、インターフェイス・エージェントモデルの提案

- 1、システム言語学から導かれる文化的生産物である記号と、精神を構造化している意味との関係を展開し、社会システムでの反省機能としてのインターフェイス・エージェントモデルの設計を試みる。
- 2、哲学を生活主体に対する反省学とし、それを生活世界の科学や生活システムへの批判学として、反省学と生活世界の科学との相互点検の回帰運動を進める機能をインターフェイス・エージェントモデルと考える。
- 3、工学分野で研究されてきたインターフェイス・エージェントモデル、レンズモデルを生活世界のインターフェイス・エージェントモデルに活用するための批判的検討を試みる。生活システム工学の理論的土台を模索する。

図1、 生活主体と生活資源の相互規定運動

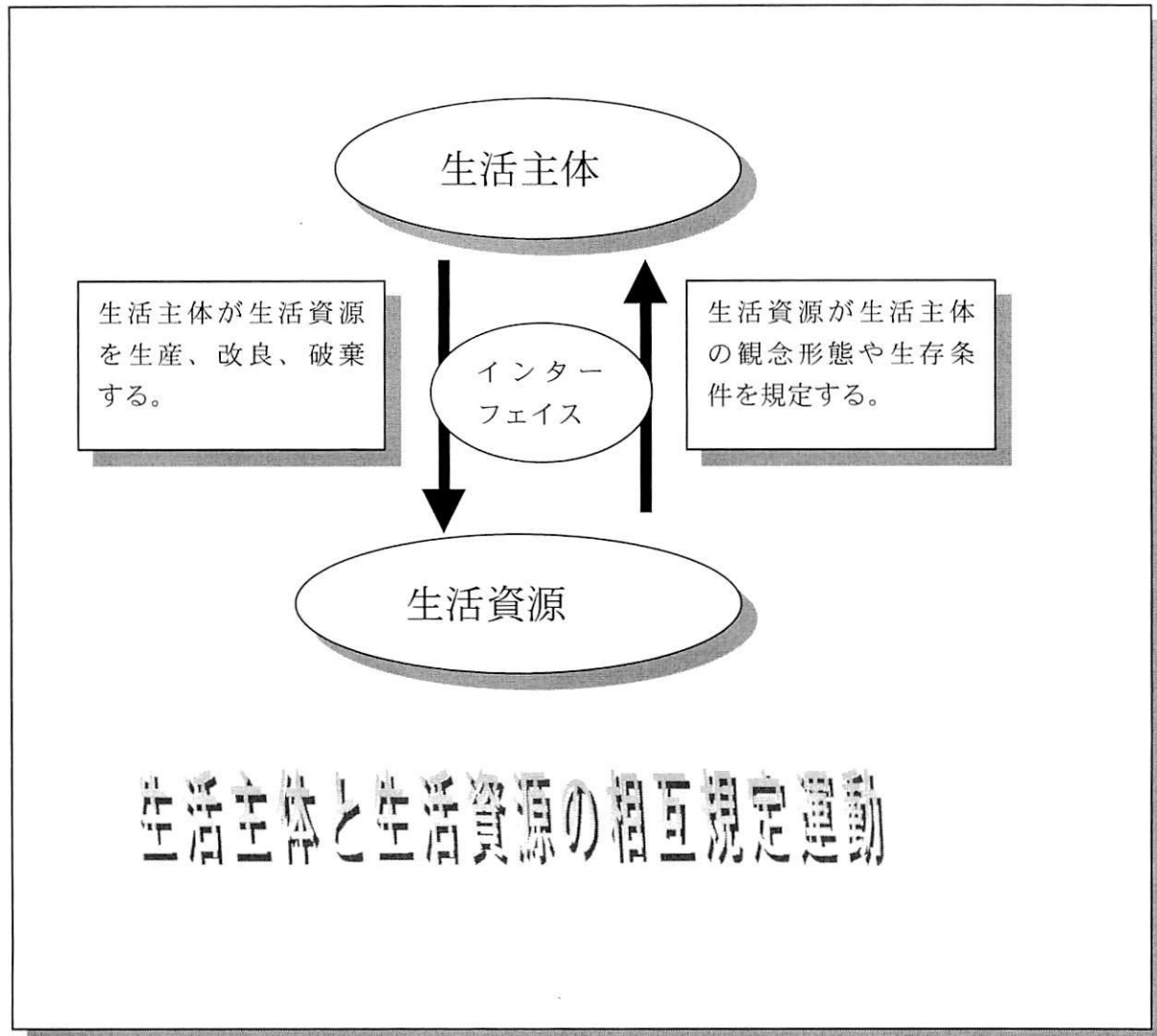


図2、 社会身体の通時的再生産の運動形態

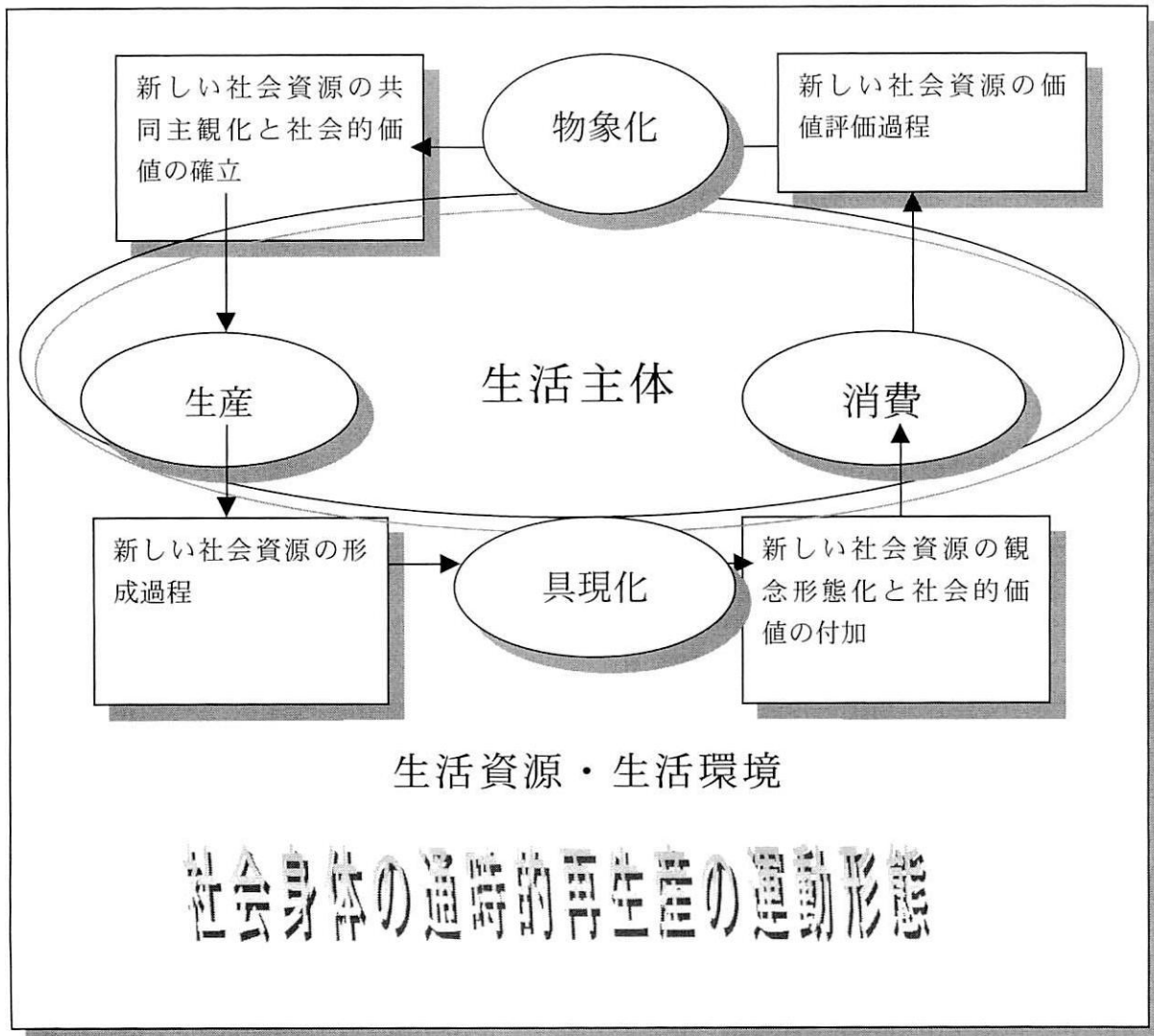


図3、 生活主体と生活資源の通時的相互生産運動

